

# 主題単元学習を通して

島 津 貴 宏

## ① どんな授業をしたいのか

「やれやれ終わったー」

こんな感じで背伸びをされることがかりする。

「落ちこませでは気の毒だ」などと生徒は気を使ってはくれない。逆に、

「え？ もう終わり？」

こんな反応はうれしい。

授業の始まりに「チャイムが鳴ったぞ。」と言わなければならぬのは悲しいが、授業の終わりでならうれしい。次の時間の先生が来てしまうこともある。

できれば、「もう終わり？」に加えて「力がついたなあ」と思っ  
てほしいのだが、そこまでの道はまだかなり遠い。とりあえず、  
時計とにらめっこしなくてもすむような授業がしたい。

自分が生徒になって、その教室で授業を受けてみたいか。

自分の授業をこういう目で見ている。文章にしてまとめたりするとなんとなくいい授業に見える。が、「自分もその教室で勉強してみたい」と思えるような授業は少ない。  
「もうすぐチャイム。十、九、八、七、六、五……」と秒読みしなくてすむ授業をしたい。

## ② 主題単元でやってみようと思ったわけ

- ・教科書の教材の並べ方に魅力を感じなかった。
- ・計画を立てる時、教科書のこれは読んで、これは飛ばしてと  
いいかげんな選び方をしていた。
- ・教材選択の視点が定まっていなかった。
- ・「全然おもしろくない文章だ」と思いながら授業することが  
あった。
- ・計画が紙の上だけのプランで、実際には「行った所まで」と  
いう感じだった。

- ・定期考査に向けて教材を消化していくような感じだった。
- ・授業の工夫がその場しのぎのものに終わっていた。
- ・発問↓解答(回答)の授業に行きづまっていた。
- ・書く機会を増やしたいと思った。
- ・書くことの苦手な生徒が多かった。
- ・「作文」という言葉に抵抗を感じる者が多かった。
- ・書き出す意欲を持ってほしかった。
- ・一つの教材で考えていたことを教材を組み合わせることで深められると思った。
- ・単元を積み重ねていくことで学習が効果的に行えると思った。
- ・主題を設定することで問題意識を育てられると思った。
- ・自分自身の研究の柱を持ちたかった。
- ・こんなことから主題単元の授業を始めた。
- ・が、実際にやってみると反省点がすぐに出てきた。
- ・教材の蓄積がない。
- ・主題を決めるのに時間がかかる。
- ・教材選びに時間を取られる。
- ・選んだ教材に自己満足していた。
- ・主題に対する思い入れが強すぎた。
- ・教師の一人よがりになった。
- ・主題追求に傾きすぎて、一つ一つへの言葉へのこだわりが薄れた。

### ③ 主題単元「慟哭」のきっかけ

四年前『山月記』を教室で読んだ。欲求不満が残り、チャンスがあればと思った。が、もう一度教室で読むには指導者である私自身に新鮮な興味が必要だった。

『高校戯曲選19(晩成書房)』に「山月記異聞」があり、「月刊国語教育(一九八五・十一月号)」にも載っていた。「脚本」でやってみたいと思った。

二年生三学期の一番最後に置くことだけを決めた。

「言い終わって叢中から慟哭の声が聞こえた。」

弔問のとき慟と哭とあり、死者との関係によってその礼が異なる。「論語、先進」「子、これを哭して慟す」とあり、孔子が顔淵の死を弔って、思わず慟したので、従から「子、慟せり」と注意されている。近親のものだけが、慟をする定めであった。孔子にとっては、「天、予を喪はず」というほどの哀しみであった。「夫の人のために慟するに非ずして、誰がために慟せん」と孔子はなお慟することをやめなかつたという。

『字統』より

単元の主題「慟哭」はここから決めた。

二年間、担任としてもつきあってきた学年。来年度はたぶんいっしょに勉強できない。

この主題と副主題の「愛するものとの別れの心情」には私の気持ちがかめられている。

#### ④ 授業案づくり

ある日、数学の先生が新聞の切り抜きを私に差し出す。

「国語の先生、どんな意味か説明を見ずに考えて。」

これやこの一期のいのち炎立ちせよと迫りし吾妹よ吾妹

『折々の歌』の吉野秀雄の短歌だった。

「国語の」をつけられると緊張する。眉をよせて考える。が、どうもよくわからない。

「吾妹？」

「炎立ち？」

「せよと迫りし？」

大岡信の言葉を読んで、声が出るほど驚いた。

十三時間の予定で次の三つの教材を選んだ。

- (1) 吉野秀雄の短歌
  - (2) 宮沢賢治の詩「永訣の朝」
  - (3) 中島敦の小説「山月記」
- (1) は妻との別れに「慟哭」する秀雄
  - (2) は妹との別れに「慟哭」する賢治
  - (3) は人間でなくなることに「慟哭」する李徴
- 三学期は教室が暗くなりがち。テーマも暗い。
- ・「ことは遊び」などの「遊び」の要素にもこだわってみたい。
- ・教材をストレートに持ちこまない工夫をしたい。

#### ⑤ 授業に入る

・「何だろう。どうなるんだろう。」と興味をわかせて、眠気をとっぱらいたい。

#### (1) 吉野秀雄の短歌の授業（三時間）

次のことを班ごとにOHPシートにまとめなさい。

「語意 解釈 情景 作者の心情」

歌を板書にして、この指示をしたところで授業での教師の出は終わったようなもの。あとは生徒から出てくるものにまかせて授業が進む。

・さかんに私にさぐりを入れてくる班。

・放課後遅くまで残って「カンペキダー」と満足げに提出していく女子。

・「絵がかけんけエ許してください」と頼みこむ男子。

どうにか七クラスの五十九班がOHPシートの提出完了。ずばりの意味を書いている班はない。

ユニークな絵に大笑いしたり、感心したりの生徒の表情がうれしい。情景は三種類に分かれた。(資料1参照)

夫が病氣、妻が看病

妻が病氣、夫が看病

病氣とは関係ない

違いをまとめる。意見を書いたものを材料にして歌の情景を

いっしょに考えていく。

最終説明をする。

・それがどういふことなのかわからない者

・騒然となる女子クラス。終わりのチャイムも耳に入らず、十分以上わめき続け興奮冷めやらす。

・男子の多いクラスは冷静。「じゃあ、夫の立場ならどうするか」と尋ねると照れたような顔をしてごまかす。

\*準備したものの

・OHP 機器、OHP シート各班一枚、マジック

・各自で書いた情景、心情で書いたものを対立点に明確にしてグループビシクしたプリント

・吉野秀雄の四首を載せたプリント

・国語辞典、古語辞典（忘れた班用）※ほとんど忘れていた

参考

これやこの一期のいのち炎立ちせよと迫りし吾妹よ吾妹

吉野 秀雄

『寒蟬集』(昭二二) 所収。師と仰いだ公津八一と共に、昭和短歌に

おいて孤高の峰をなす歌人。昭和十九年晩夏、最初の妻はつ子が四児を残して四十二歳で病没した。右歌集には死の時に始まる悲痛な亡妻追慕の歌がひしめき並ぶ。昭和期挽歌集の随一である。死を目前にして、これを限りの命を燃えたたせ、男女の営みを夫に迫る妻。一切空の大千世界に、慟哭する炎となって立つ二つの命の火柱。

『第三折々の歌』より

(2) 宮沢賢治「永訣の朝」の授業(三時間)

・ゲーム「二十の扉」を利用して作品の内容を想像する。

・朗読テープを聴写する。

・妹トシと賢治の心情をまとめる。

※ 二十の扉

回答者を選び、例えば名詞なら名詞を考えてもらう。残りの者が質問を順にしていく。「それは生き物ですか」「店で売ってましか」というぐあいに。回答者はハイかイエエ意外の言葉で答えられない。二十の質問内で回答者の考えた言葉を当てられるかどうか、どういう質問をするとより早く回答に近づけるか。小学生から大人まで楽しめる。

物語か(イエエ)

長いか(イエエ)

詩か(ハイ)

おもしろいか(イエエ)

有名か(イエエ)

短いか(イエエ)

授業で習ったか(イエエ)

誰にでも内容がわかるか(イエエ)

自分たちに関係があるか(ハイ)(イエエ)

作者は女の人か(イエエ)

内容は暗いか(ハイ)

最近書かれたものか(?)

作者は生きているか(？)

悲しい詩か(ハイ)

死ぬ詩か(ハイ)

戦争の詩か(イイエ)

季節に関係のある言葉があるか(ハイ)

冬か(ハイ)

病気で死ぬのか(ハイ)

人が二人以上出るか(ハイ)

子供が死ぬか(ハイ)

家の中で死ぬか(イイエ)

女の子か(ハイ)

兄弟か(ハイ)

妹か(ハイ)

お兄さんが妹のことを書いたものか(ハイ)

病気で死ぬか(ハイ)

少し時代が前の内容か(ハイ)

病気ははやったものか(イイエ)

白血病か(？)

広島か(？)

寒い地方か(ハイ)

妹が死んだあとの詩か(イイエ)

死にぎわか(ハイ)

雪が降っているか(ハイ)

妹は遺言を残したか(ハイ)

回答者は二、三人で交代した。「永訣の朝」のプリントを持って質問に答えさせた。質問されるたび回答者が教卓のかけでひそひそと相談したり、意見が分かれて言い合いになったり。その光景がなんともおかしい。

「おもしろいかって……？」

「おもしろいかいねー」

「おもしろくないねー」

「うん」

「イイエ」

ゲームのウォーミングアップなどを含めてこれだけでまる一時間かかった。

テープの聴写では「あめゆじゅとてちてけんじゃ」でどのクラスも決まって大騒ぎになる。「いまのなんなん？」実にうれしそうな顔をする。

トシと賢治の心情は説明中心。

\*準備したもの

・「永訣の朝」本文だけのコピープリント

・朗読テープ・テープレコーダー

・妹の言葉について意見を書いたものグループピングしたプリント

(3) 中島敦「山月記」の授業(九時間)

・変身遊びできっかけを作る。

・読み聞かせて感想を書いてもらう。

・虎の絵をかいいて遊ぶ。

- ・環境・人物・あらすじ・文体・主題などを一通りまとめる。
- ・場面を分けてシナリオを作っていく。
- ・班ごとに読み合わせ練習をし、リハーサルする。
- ・シナリオを手直しする。
- ・シナリオのできあがり。
- ・「舞台」で読む。

※ 変身遊び

なにになが、だれだれが（一枚目の紙）

どこどこで（二枚目）

なにになにに変わった（三枚目）

『ことは遊び、五十の授業』より

ねこが屋根の上でぼうしに変わった

おやじがおふろで象に変わった

毛のないネコが教室でスリッパに変わった

おばあさんが学校の職員室で悪魔に変わった

さるが学校でたこ焼きに変わった

先生がかんづめの中で野ザルに変わった

鳥津先生がトイレでプッシュマンに変わった

宮内先生が教室で目玉おやじに変わった

幼い子供がリフトの下で大きなあめ玉に変わった

小さなバッタが暗い公園で美人に変わった

アイドル歌手が道路でおじいさんに変わった

人間が学校で手袋に変わった

サルが公園でスケベに変わった

ゴルバチョフ書記長が電話ボックスでカベに変わった

※ 山月記の教師の読み聞かせ

約二十五分

※ 虎の絵

画用紙に顔や体をリレーで順番に書く

変身遊び。

「ある男が中国で虎に変わった」というのをなにげなく言いた  
ための遊び。

このまま捨ててしまうのは惜しいから「国語表現」の授業で  
「書き出し文」にして小説を書いて楽しんだ。  
読み聞かせる。

前回と今回で都合十回以上読み聞かせた。読むたびに李徴の心  
情がよくわかってくるからおもしろい。何か発見がある。そんな  
教師の気持ちとは裏腹に男子が寝る。その声は我が友李徴子では  
ないか!!」と大声を出したり「何かわけのわからないことを叫びつ  
つ」で本当にわけのわからない叫び声を出したりして驚かす。  
虎の絵。

遊び。言葉の学習ではない。

「もう、変なことばかりさせる。」

と文句を言う。そのくせ大はしゃぎ。目をかいては大笑い、ゆが  
んだ線をかいては大笑い。オスカメスにこだわる男子。涙を浮か  
べてまで笑う者もいる。できあがって品評会。よそのクラスのも  
も見せろとうるさい。

これも捨てるのは惜しい。虎の顔の部分だけ切り抜いて「わっ

か」をつけ、シナリオ上演の時、李徴役の生徒にかぶってもらうことにする。

- ・シナリオとはどういうものか
- ・どういうふうに書けばいいのか
- ・すぐれたシナリオの紹介

・生徒が書いたシナリオの紹介（あるいは合評会）

こうしたことがほとんどできなかった。生徒もなんだかよくわからないままにムードに乗せられてやっている。まる二年間つきあってきた強みである。

他教科の先生から授業のあまりをもらい歩いて七クラスを二時間ずつつ増やす。空き時間がなくなった。

〈シナリオ場面割〉

1	(プロローグ一)人食い虎旅人を襲う――袁修の回想――
2	(プロローグ二)袁修、妻子に語る――真実は伝えられるのか――
3	(虎へのステツプ一)順調な人生――光り輝く日々――
4	(虎へのステツプ二)詩人への夢――希望の背後に忍び寄る影――
5	(虎へのステツプ三)絶望の日々――挫折、屈辱そして発狂――
6	袁修と人食い虎との出会い
7	(悔恨と絶望の日々一) ――李徴の告白①――虎への変身 ――人間の心で振り返る残酷な行い――
8	(悔恨と絶望の日々二) ――李徴の告白②――詩への執着と虎になった理由 ――過去への悔いと現在の苦しみと未来への絶望――
9	(エピローグ)涙の別れ――李徴の行く末――

\*準備したもの

- ・商用紙、マジック
- ・シナリオ原稿を班の人数分コピーしたもの
- ・完成したシナリオ印刷
- ・舞台設営(暗幕・照明・ダンボール製の月とくさむら・竹・ついたて・机・椅子など)
- ・小道具(虎の面・李徴の妻用のかつら・エプロン・李徴の子供用のおもちゃ・鉄砲・水筒・李徴の家庭の湯飲み・茶碗・花瓶・ラジカセ・ワーナーブラザーズの映画からとったライオンの鳴き声・進士の合格発表掲示用大判用紙・ついたて)
- ・観客席、ビデオ

〈シナリオにしてみてわかったこと〉

李徴は公用で旅に出て、汝水のほとりに宿り、ついに発狂した。発狂前と発狂後に分けると、四年前の授業では発狂後が中心だった。

「臆病な自尊心」「尊大な羞恥心」……李徴の語りを読み解いていった。

発狂前の第一段の扱いが軽かったのだ、とシナリオにしてみてもわかった。第一段では言葉の解説に気を取られていた。

- ・第一段をどう読み理解するかで、第二段以降の読みが決まる
- ・第一段に長い年月が凝縮されている
- ・凝縮されているものを、解きほぐし、ふくらませる必要がある

・説明ではおさまりきれないものがある

「離西の李徴は博学才穎……」書き出しの一文にあるドラマ。

「いくばくもなく官を退いた」

「人と交わりを絶って」

「貧窮に堪えず」

こうしたわずかの文節にこめられたドラマ。そうしたことをシナリオが教えてくれた。

「妻子の衣食のために月に節を屈して」東方へ向かっていく李徴の一家。(いつごろ結婚したのだろうか?)

「かつての同輩」の命令にずたずたになっていく李徴のプライド。

第一段のドラマを浮かび上がらせることができれば、第二段以降がつけたしのような気分にさえなっていくほどなのである。

〈もし、もう一度読むとしたら〉

朗読とラジオドラマ(放送劇)にする。

・第一段(衰倦が登場する前の段)を複数のグループでラジオドラマにする

・第二段以降は朗読を中心にして何度も音読させたい。間、得度、イントネーション、声量。読めば読むほど新しい発見があった自分の体験をもとにして。

⑥ 「作文」ではこんなところにこだわった

(二年間の主題単元学習を通じて)

(1) ふくらませてみるとおもしろい

「要約することはおもしろくない」

ある先生の言葉。

「たとえば大意とか主題は、エピソードのようなおもしろい部分、いわば余分なものを削り取っていく作業。だからどうやってもおもしろくないですよ。」

生徒のいい表情が印象に残っている場面を思い浮かべると、要約とは反対の「ふくらませる」方向に動いていた時が多い。

・ 三つの単語からふくらませて文章を書いた

・ 続きを書いてふくらませた

・ 新聞の見出しをふくらませて愛の定義をこじつけた

・ 物語の先のストーリーを予想する

・ シナリオを書いた

授業には要約、つまり「しばませる」方向に向かう場面が多い。

・ 作品の内容を読み取っていく

・ それをまとめていく場面

・ あらすじをまとめる

・ 主題をまとめる

「ふくらませる」方向を授業の中にうまく組み合わせると生徒の表情が生き生きとしてくることに気づく。

(2) できるだけ種類の違う文章を書いてみたい。

・ 意見文 新聞投書への意見を書いた。

・ 投書 毎日新聞に投書したら四つも載った

・ 物語 三つの単語をつないで文章を書いた



『民話』と『高瀬舟』の続きを書いた

・手紙文

三年後の自分にあてて手紙を書いた

・聞き書き

身近な人の青春体験を聞き書きした

・生活文

恋体験をつづった

・レジメ

犀星、朔太郎、啄木、山頭火とふるさとのかかわりを調べた

・小論文

「生きるということ」「愛するということ」など抽象的な題で書いた（ムズカシイ）

・ブックリポート

『セメント樽の中の手紙』を紹介する文章を書いた

・描写文

絵や写真を見て描写して書いた

・シナリオ

『山月記』をシナリオにした

・読書カード読み聞かせた時に書くことが多い

休み中の課題にもした

二年間、二単位の授業。いろんな文種にふれてもらいたくてこうなった。つい感想文や体験中心の作文が多くなってしまわないように気を使った。

感想はメモのような形で小さめの紙に書いてもらうことが多かった。

（山口県立田布施農業高等学校教諭）



〈病氣と無関係の型〉

一期ののち炎止むと逆り<sup>おかしな</sup>毒<sup>おかしな</sup>

生かされてから、怒り  
死かされてから、恨み  
（死）  
責しよ・妻・恋人

おかしな

●**呪**●

おかしな生活は恨みだす。毒だす。

●**心憎**●

おかしな生活は恨みだす。毒だす。

5班  
徳田  
西田  
林



by kyoko.







